

日本史 明治時代の子どもになって遊んでみよう！

絵双六「尚武須護陸」に読みとる歴史

地理歴史科 石 出 みどり

1. はじめに

本時は3年生必修「現代社会」で行ってきた補足的な授業¹を、2年生必修日本史Aの投げ込み授業として再編する試みである。対象の2年生は必修科目として1年次に現代社会と地理A、2年次に日本史Aと世界史Aを学び、筆者は世界史Aを担当している。日本史Aの学習は幕末から始まり、研究会当日の時点では昭和まで進んでいた。本授業の原案は前田徳弘氏による日本史の授業「尚武須護陸の世界」²である。

2. 絵双六「尚武須護陸」とは

紙に絵や文字を描いて遊ぶ絵双六は、日本では江戸時代の中ごろから、浮世絵の木版技術の発達を背景に普及した。内容は極楽浄土までの道筋をたどる浄土双六、あるいは日本橋から京までの東海道五十三次を行く道中双六や名所巡り、また歌舞伎や風俗案内、出世双六など様々で、絵双六は遊びながら知識や文字を学べる教育的な遊具であった。

明治時代になると文明開化や富国強兵、維新後の歴史や新しい官位をテーマとした絵双六が現れ、道徳的な意味も込めた国民教化の一手段となった。その後絵双六は子ども向け雑誌の正月付録や商売の宣伝媒体、配布物ともなり、多色木版刷りの錦絵を見る喜びと大勢で遊ぶ楽しさから、庶民の人気を集めた。双六の季語は「新年」で、各自が振り出すサイコロの目に沿ってコマを進める過程は楽しい運だめしであり、人数を問わずに大人も子どもも遊べる正月にふさわしい遊びであった。

「尚武須護陸（しょうぶすごろく）」については、大濱徹也氏の著作『日本人と戦争』による。これは時の東宮侍従小笠原長育（ながなり）が考案した双六で、日清戦争（1894年7月開戦）直前の1893年12月に東洋堂から発売された。「眠れる獅子」清との開戦間近かの緊張と高揚の時に、「武をとるとび、すべからく陸を護るべし」との意を込めて命名された「尚武須護陸」とは、どのようなものであったのだろうか。宣伝文には東宮（のちの大正天皇）の「御愛玩一方ナラズ実ニ有益ナル双六ナリ」、「本邦ノ子弟ヲシテ尚武ノ気風ヲ惹起スルモノ」とある。「振り出シノ小学生徒ニ始マリ徴兵軍人志願ヨリ尉官佐官中将大将ニ至ルマデ十数段ニ頒チ、身ヲ立テ名ヲ揚ゲテ国家ノ干城トナリ」、栄誉を死後に輝かせるまでの人生行路を示したもので、「真ニ家庭教育ニ有益」なだけでなく「修身齊家ノ一助」となると書かれている。

実物は大きな赤枠に縁取られた色刷りの絵図で、原寸970mm×680mm、ほぼ模造紙大である（図1）。「木版着色摺八枚継ぎ」「和紙全一折」で、「正價金卅銭」「郵税金二銭」あわせて32銭である。構成は縦4列横5段の19マス、右下の2マス分が振

出しの「小学校教場の図」で、最上段中央に「上がり」となる「靖国社」と「大将」が左右に並ぶ。黒服の重々しい軍人姿ながら、軍帽や上着の襟、軍袴（ズボン）の側線の赤が映え美しい。軍人たちは階級が上がるにつれて髭を生やし、凛々しい白馬の騎乗姿となっていく。

それではゲームを始めてみよう。振出しで、1、2、3の目は「軍人志願」、4、5、6の目は「徴兵」である。「徴兵」へ進んで、1、3、5と奇数の者は「兵卒」となるが、4、6は「不合格」で振出しに戻る。2は指示がないので「そのまま留まる」と考えた。

「兵卒」では、1、3が「士官候補生」、2、5が「軍曹に抜擢」と順調に出世するが、4の目を出すと何と「軍律に触れて銃殺（退局）」となる。6では「1年志願兵満期の後予備少尉となる（退局）」のようになかなか「上がり」に行きつけず、逆に次々に「退局」していく。早ければ3回振っただけで、あっという間に「軍律に触れ銃殺」である。さらに「軍曹」になっても「軍律に触れ兵卒となる」落とし穴がある。

「軍人志願」から「幼年生徒」、あるいは「士官候補生」へとエリートコースを進んでも、「学術劣等に付き兵卒となる」「貶せられて曹長となる」などが行く手を阻み、昇進が難しい軍隊の厳しい実社会を伝えている。また「曹長」「少尉」「少佐」の3つの階級で登場する「戦死」は単なる戦死、ゲーム終了を意味するのではなく、「戦死、靖国に祭（ママ）らる」となって最上段に「大将」と並ぶ「上がり」、すなわち最上の結果として位置づけられている。

大濱が指摘するように、この双六が造形する小宇宙は正に「富国強兵をめざした日本の縮図」である。大濱は「戦死、靖国に祭（ママ）られる」の道がある「曹長」「少尉」「少佐」はそれぞれ分隊長、小隊長、中隊長であり、前線指揮官として兵と共に戦死する確率が高い現実の投影にほかならない、軍律違反での兵卒の銃殺、「貶（おとし）められて」の降格等、実に軍隊社会がリアルに描かれている、当時の子どもたちはこの遊びを通して「醜（しこ）の御楯（みたて）」となって天皇のために死に、靖国神社に祀られることが榮譽を死後に得る早道であり、至上の価値だということを自然に体得しただろう、ここには明治日本が育てようとした国民像の範として、良き臣民となる道が提示されている、と解説している。

それでは明治・大正期の他の双六遊びには、どのようなものがあったのだろうか。この遊びが単なる遊びではなく、教育性を持った国民教化の手段のひとつであったことを反映して、対象は男子、女子、明確に分別されている。例えば男子向け双六の「教育男子善道雙録」（1899年）では小学校を振出しに、「奉公」「父母ニ礼」「運動会」と進んで「大学校」「海軍軍人」「洋行」、そして「上がり」の「二重橋」（天皇への拝謁）までの立身出世の過程が全14コマに描かれている。

一方女子教育を目的とする絵双六は、「花嫁双六」の呼び名もあるらしい。「現代婦人双六」（1913年）では若い母親が授乳する「一歳ナキムシ」の誕生に始まり、旭日旗のような放射状のマス目を右回りに女性の一生を進む。「五歳ママゴト」「九歳オテンバ」「十四歳ベンキヤウ」「十七歳ミエバウ」と続いて、21マスめ綿帽子の花嫁姿の

「廿一歳結婚」が「上がり」である。さらに「新案結婚双六」(1911年)は全45マス、「結婚」を振出しに「農家の妻」「官吏の妻」「お料理自慢」「借金」「引越」「豊年」「商売繁盛」などを経て、「一家団欒、子孫繁栄」が「上がり」となる。また「婦人一代双六」(1913年)ではさまざまな女性の職業、地位が、最下段の「墮落級(女優、新しい女等)」から「労働級(髪結、女工等)」、「修養級(洋行、高等女学校等)」、「独身級(小商人、御殿奉公等)」、「主婦級(内助、不和等)」、最上段の「社交級(名誉会長、政治運動等)」まで、大正期の社会を反映する内容が6段41マスに描かれ、三代揃った家族が楽しく双六遊びをする絵図が「上がり」となっている。

3. 授業『尚武須護陸』に読みとる歴史

(1) 授業の準備

- ①プリントA『尚武須護陸』に読みとる歴史(双六の説明、遊び方、用語説明、進行記録表など)
- ②プリントB「名誉の戦死」(小菅信子『14歳からの靖国問題』第4章より)
- ③プリントC『尚武須護陸』に読みとる歴史(大濱徹也氏によるweb上の解説)
- ④課題提出用紙
- ⑤「尚武須護陸」をA3版に縮小したカラーコピー10枚(ラミネート加工で板状にしておく)
- ⑥サイコロ 10個
- ⑦「教育男子善道雙録」(1899年)、「現代婦人双六」(1913年)、「新案結婚双六」(1911年)「婦人一代双六」(1913年)それぞれ本から拡大カラーコピーし、回覧用にラミネート加工しておく。
- ⑧書画カメラ、プロジェクター、スクリーン

(2) 授業の目的

- ①軍隊の組織、将兵の序列、軍律、靖国神社について知る。
- ②軍人、兵士として生きた人々の多様な人生展開を知る。
- ③軍人に志願すること、靖国神社に祀られることを名誉とする考えがどのようにして国民に広まっていったか、子どもの遊びと国策の関係について考察する。
- ④子どもの遊びや国民の日常生活を通して、日清戦争開戦前夜の社会について考察する。
- ⑤富国強兵の時代、女性に求められていたものは何か、確認、考察する。

(3) 授業の展開

《1時間め》

- ①冒頭で本時の授業テーマは『尚武須護陸』に読みとる歴史であること、前半の1時間で「絵双六の説明」→「班ごとに遊ぶ」、2時間めに「報告、感想、疑問の提示」→「話し合い、考察」→「課題提出」と進めると大まかな流れを伝える。また世界史Aで「帝國的国民の形成～イギリスにおける帝国意識の拡

大～」³を学習したことに触れ、思い出させておく。

- ②プリントAを用いて、タイトルの「尚武須護陸」の読み方、命名の意図を確認する。
- ③宣伝文を読む。文中の用語や軍隊の階級について確認する。
- ④絵双六「教育男子善道雙録」(1899年)をプロジェクターでスクリーンに映し、明治後期の日清戦争後、男子の立身出世はどのようにイメージされていたか紹介する。続いて女子には何が求められたのか考えを促し、カラフルな「現代婦人双六」(1913年)、「新案結婚双六」(1911年)「婦人一代双六」(1913年)を映して説明する。しかしこれらは明治の同時期ではなく、大正期のものであることも伝える。
- ⑤プリントAで遊び方を確認する。各自コマとして消しゴムなどを使うよう指示する。「予備」「退局」などの意味の説明、目の数で特に指示のない場合はそのまま留まること、毎回の昇進・降格等を自分の用紙に記録すること、時間内に終了した場合は2回目、3回めの「人生」を続けるよう指示する。
- ⑥座席ごとに4人の班を作らせる。各班にサイコロ1個とラミネート加工した「尚武須護陸」を配る。
- ⑦班ごとに自由に遊ぶ。

《2時間め》

- ⑧課題提出用紙を配布し、課題を提示する。
- ⑨1回めの人生ではどの階級まで昇進したか、しなかったか挙手をさせ、クラス全体の様子、傾向を示す。各自のたどった「人生」について、感想とともに発表させる。「幼年学校」のエリートコースに乗り「大将」や「貴族院議員」となった者がいる一方、「靖国社」が多いこと、「銃殺」となった者がいることなど、多様な兵隊、軍人の人生が示される。
- ⑩双六遊び全体について、感想や疑問などを発言させる。
- ⑪プリントBを用いて徴兵制、靖国神社に関する基本事項を整理、確認する。出征する男性に対し、女性はどのような立場にいたのか。キーワードとなる「軍国の母」について、昭和の歌謡曲「軍国の母」(1937年)、続いて「九段の母」(1939年)の歌詞を生徒に朗読させ、質疑応答による内容確認ののちYouTubeの映像をスクリーンに映し、歌を紹介する。アメリカ合衆国のアーリントン国立墓地の歴史を紹介する。
- ⑫課題と提出日の確認。授業の復習、まとめとなるプリントCを配布する。

今回2年生対象の日本史の授業に再編するにあたり、1時間めの授業の④に時間を取り、2時間めの授業の⑪を加えた。④では「尚武須護陸」を扱うには対となる女子向けの双六の紹介がほしい、生徒の関心も大きいはずと考え、スクリーンに映し説明、回覧した。明治期の双六が見つからず大正期のものだったが、女性史の面からも紹介

したいと考えた。

⑪での朗読は事前に演劇経験のある生徒に依頼した。歴史的シーンの演劇的な対話や関連歌曲の歌唱は、通常の授業でも効果を高めるため、前もって関係生徒に依頼している。

また歌を聞かせるため web 検索をしたところ、YouTube に「九段の母」(2分50秒)を見つけることができた。歌詞とともにニュース映画のような戦前の昭和期の靖国神社と参拝者の白黒映像が流れ、理解を深めることができたと考える。

アーリントン国立墓地は、南北戦争中に連邦政府が南軍の総司令官リー將軍の領地を没収し、戦死した北軍兵士の墓を建てたことに始まる。その後1890年代、特に1898年の米西戦争以降急速に南北和解が進み、1900年には南軍の戦死者の一部も埋葬されるようになり、1914年には南軍のための記念碑が建設された。さらに1925年には連邦議会が満場一致でリー將軍の名誉を讃える施設として、旧宅のアーリントンハウスを整備した。南北戦争、米西戦争は世界史で既習だが、異なる側面からこれらの戦争を振り返り、理解を深めることができると考えた。

日常生活における帝国意識の形成、拡大については、生徒各自が19世紀イギリスの学習を思い出し、比較、考察して理解を深めることを意図した。

4. 研究協議

協議では、「戦争を扱うと暗い雰囲気になりがちだが、遊びの中で学ぶという扱いはあると気づかされた」「遊びを通して、当時の世界観がスーッと入って行けることに気づいた」「困難校でも使える授業だと思った、軍人将棋も使えるだろう」「戦争の時代を実感させるため軍事郵便を見せたりしている。しかし紹介にとどまり参加させることは難しい。双六は参加できる点が素晴らしい」「ローカルとグローバルを行き来するような視点が必要だと感じているので、日清戦争から南北戦争、アーリントン墓地へと展開する授業はとても参考になった」「生徒がポンポン発言していて、日ごろから声を出させているのだろうかと感じた」との発言をいただいた。

また「今日の授業のポイントは3つある」として、「1つめは教材・教具が工夫されていること。2つめはアーリントン墓地と靖国神社を比較し、日米を対比させるなど日本史の授業の中に世界史的、公民的視点が組み込まれていること。3つめは生徒の言語活動を重視していること。双六、レポート、発問・発言、朗読などさまざまな言語活動がされていた」とまとめていただいた。

問題点としてあがったのは、対象年代が日清戦争から日中戦争まで長期に及ぶことである。明治、大正、昭和の戦争には一貫した部分があれば、変化していく部分もある。個々の文化の歴史的、社会的背景について、十分に確認できなかった。女子向けの同時代の双六を探せなかったことも残念である。

また教材化にあたっての資料批判の必要について、大切な指摘をいただいた。この尚武須護陸が実際にどの程度売れたのか、どれほど遊ばれたのか、国民はどう受けと

めたのかなどは不明で、確認が不可欠である。また、政府の意図や制作者の思いとは別にある国民の感情、受けとめ方を探っていくことが大切である、との助言も受けた。この点については「今回の授業ではそこまで時間をかけられなかったが、生徒自身に気づいてほしいと考えている」とお答えした。後掲の生徒の感想にそれを見ることができると考える。

5. 生徒の考察と感想

生徒は1時間めの授業は賑やかに双六を遊び、2時間めは意見交換や説明、朗読、映像の鑑賞など活発に活動した。課題の提出は1週間後である。こうした課題を課す場合、自分ひとりで考えて書くのではなく、家族や友人、知人と話題を共有し、意見交換をして考察を深めるよう勧めている。授業を振り返り、他者に学習を説明することを通して、疑問の明確化や理解の深まりを期待し、また単に知識を増やすのではなく自分自身で気づき、発見し、理解してほしいと考えるからである。

以下、課題と生徒の考察を挙げる。空欄は復習であり、各自埋めることとしている。

明治の小学生が求められた世界 「尚武須護陸」に読みとる歴史

1870年(明治3年)に始まった普仏戦争で翌年()が敗れ、()が勝利すると、大日本帝国は従来()式軍制を()式軍制に転換し、天皇を頂点とする軍事国家の形成に努めた。それは日清・日露戦争を経て、より一層強まっていく。こうした時勢は子どもの世界にもストレートに反映し、学校教育のほか戦争ごっこや兵隊ごっこ、双六などの遊びを通して、軍隊は身近に感じるものとなっていった。

当時流行したという「尚武須護陸」を通して、帝国軍人の一生を体験してみよう。あなたの軍人人生はどうだっただろうか。友人たちの人生は？そしてこの双六から、あなたは元帥・天皇に仕える軍人の社会をどのように感じ、考えるだろうか。この双六が作られた明治26年ごろ、子どもたちは国家から何を求められたのだろうか。女子向けの双六についても考えてみよう。また、疑問やわからなかったことも記しておこう。

◆私の軍人人生は、徴兵され、合格して兵卒となり、そしてその後すぐに「軍律に触れ銃殺」でした。この双六は実際の確率を元にしていて、当時の軍人の世界をとにかく怖いと感じました。本当に少しの違いで、たった3回のサイコロを投げただけで死んでしまうのです。私の班では何回かやっていくなかで、4人中3人が同じ死に方をしました。これにはとても驚いてしまいましたが、実際に自分の身近であったことだったらと思うと…、考えたくもなかったです。

多くの人は遊びであっても「勝ちたい、より良い成績を残したい」と思うと思いま

す。私はこの双六は人の向上心をうまく操っていると思います。子どもたちはもっと上の階級に行きたい、良い人生を歩みたいと思うでしょう。そして、それが現実世界でもあてはまる状況があれば、「双六にあるいちばん良い生き方、人生＝自分がめざすべき人生」という潜在意識につながるのだらうと思います。また当時天皇は神として崇められていたが、皇太子が愛玩した双六となれば親が子供に与えるのは領けるし、また自分が親の立場でもきつとそうしていると思います。

私はこれをやってみて、今よく行われる人生ゲームでも少し当てはまると思いました。人生ゲームの最後では、いちばん多くのお金を持っている人が勝ちとなります。人生における幸せにはたくさんの形があることは、今の社会では常識的なことだと思いますが、この人生ゲームではそうではないのです。「勝つのはいちばん多くのお金を持つこと＝良い人生」のような構図が成り立っているのです。私はこれがとても尚武須護陸に似ていると思いました。もしこのような遊びを私たちが幼いころからやっていたら、皆「お金がいちばん」と考えてしまっていたかもしれないと思いました。

以上のことから当時の男の子たちに求められていたものは、軍人として上の階級をめざしてより国に尽くすこと、国のために立派な死を遂げることであるのがよくわかりました。同時に軍律に触れれば死んでしまうため、軍の決定には逆らってはいけないということも学んでいたように思います。特に「名誉の戦死」は「軍国の母」や「九段の母」でよく表されていると思います。そしてこれらの歌には当時の女性に求められたことも表現されています。子どもが戦死したことを不幸、悲しむこと、憎むこととせず、喜ぶこととするのは、亡くした悲しみを癒すとともに、それが良い母親像であるとしようとしたのではないかと思います。

女の子の双六を見ても、最後の上がりは結婚、子孫繁栄でした。しかし女性は結婚して子を産むことだけが最終ゴールではなく、母親や祖母の姿を見て良い母とは何かを学び、自分自身も良い母になろうとしたのではないかと考えます。

疑問としては戦死すること、上の階級に昇進することを良いこととしていたけれど、戦後は東京裁判が行われたりして、それらが名誉なことではなくなりました。今までは幸せなことだと変化させていた負の感情などは、どこに向けられることになったのでしょうか。

◆私は尚武須護陸を2回やったうち、大尉が最高職となった。大尉になるまでも何回か振り出しに戻ったり大変だったのに、まして大將になるのはどれだけ大変なのかと思ひ、この双六は現実に近いということなので、小学生から大將になるまでの確率を調べてみた。

すると図(図2)からわかるように、一般人はなかなか大將になれないことがわかる。クラスで大將がひとりも出なかったのには驚いたが、これを見るとひとりでも出たらすごいことだと思った。そしてこの双六では「上がり」がもう一つある。「靖国神社」である。それは戦死を意味する。「戦死」と聞くとかわいそうだとすぐに思ってしまう現代人の私たちであるが、当時戦死して靖国神社に祀られることはその家族にとつ

て「誇り」であったようだ。そこで靖国神社について調べてみた。

HPには「国家のために尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社です。『靖国』という社号も明治天皇の命名によるもので、『祖国を平安にする』『平和な国家を建設する』という願いが込められています。」と記されている。当時天皇の位置づけはというと、この尚武須護陸が作られたのが1893年で、この4年前に大日本帝国憲法が發布され、その第一条には「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と書かれていることかにはわかるように、天皇は誰よりも偉いとされた。つまり天皇のために戦死し、靖国神社に祀られればそれは他の何ものにも代えられない名誉であったのだ。そしてそれを双六の中で「上がり」とすることで、天皇についてあまり理解していない子どもにも「天皇は偉い」という意識を植えつけることができたのだと言えるだろう。

では、どうしてそこまでして天皇の偉大さを知らしめる必要があったのか。私が考察するに、明治維新以来日本の対アジア外交の中心は朝鮮に向けられ、日本政府は欧米列強の東アジア進出に強い危機感を抱き、ロシアより先に日本の主導権で朝鮮を独立させて列強と対抗しようとし、朝鮮を属国とみなし宗主権を主張する清との対立を深めることになった。そしてこの尚武須護陸ができたのが1893年。翌年には日清戦争が起きたことから、日本はここで何としても軍事力を強化する必要があった。1872年には徴兵告諭が出されたものの実質的に免除者が多かったため、1889年には従来の免役規定を全廃し、1882年の軍人勅諭では大元帥である天皇への忠節を強調するなど、国民皆兵に向けて着々と準備が進められた。

次に明治時代の子どもの遊びにはどのようなものがあったか調べてみた。カルタ、かごめかごめ、お手玉、まり遊び、雪ころがし、じゃんけんなどが明治の主要な遊びに挙げられる。双六もこれらの遊びに並び、子どもに親しまれたようだ。絵双六はさまざまな種類があり、人生ゲームのようなものもあれば、旅の様子、さらには学習内容を含むものもあったようだ。このような多種の題材を取り上げた双六は、子どもにとっても飽きない親しみやすい遊びだったに違いない。これらの点から、政府は双六という子どもに親しみやすい遊びで、無理やりではなく自然に「天皇は偉い、自分も天皇のために戦おう」と思うようにさせ、兵を増やし、軍事力を強化し、列強に対抗していったと考えられる。

◆私は何度も軍人志願、士官候補生、兵卒を繰り返して、なかなか曹長以上になれなかった。班の人も似たようなもので、少尉まで行く人がいても、その後靖国神社に進み、上がってしまった。

振り出しが小学校で、確実に徴兵か軍人志願に進むことになるから、当時の男子は皆兵隊として国に尽くすことを求められていると思われる。作業は単純だけれどなかなか上の位につけないことから、向上心や上の位の人を尊ぶ気持ちが育まれるのだろうか。大将と靖国神社が並んで「上がり」になっていた。東郷平八郎や山本五十六など明治以来200人くらいしかいなかった大将と、戦死は同じくらいの荣誉だと考えら

れていた。

戦時中息子を戦地へ送った母や戦争で失った母のことを、「軍国の母」といった。戦争や軍に対して批判的なことを言うと、非国民だと言われてしまう時代だったので、息子を失う悲しみと憤りを、戦争そのものにも政府にも軍部にも向けられなかった。そのことにより「軍国の母」としての意識を高め、敵国である中国への敵意を高めていった。

遺族や隣人はひとしきり悲しんだ後、戦死は名誉だと互いに言い聞かせることで、悲しみと嘆きを誇りとプライドを持って克服しようとした。それが遺族の支えとなり、また靖国神社に祀られることが何よりの榮譽という意識に繋がっていったのだと思われる。

女子向けの双六はゴールが結婚になっていたり、女性がすると好ましいであろう表情を追っていくものであることから、お淑やかさ、夫に忠実などの「女性らしさ」を身につけるものなのだろうかと考えた。

課題にこの日の授業の感想も添えられていた。

- 軍人の階級について、私は詳しく知らなかった。しかし授業を受けて遊んでみると、階級の順番がよくわかった。なかなか位が上がらないこと、戦死は上がりということに衝撃を受けた。「尚武須護陸」ひとつをとっても時代背景をたくさん考えられるので良かった。
- 人がたくさん来ていて少し緊張しました。イギリスの話と日本とで共通点がたくさんあって、日本史と世界史が繋がるということをあらためて実感できて、面白かったです。平気で人が死ぬ項目がある双六を、とても楽しんでやってしまいました。
- 実際に双六を体験することができて、できごとだけを学んでいくのではなく感情まで味わうことができました。靖国神社は毎年ニュース等で取りあげられていて、この授業で今まで曖昧に流して聞いていた報道などが身近になった気がします。アメリカのアーリントン墓地と比較したりしていて、とても理解がしやすかったです。
- よく教科書などに「娯楽を利用して政府等の理想を浸透させる」ということが書かれていますが、今回「尚武須護陸」を遊んで、実際にそのことを体験できました。私たちは既に戦死は良いことではないという価値観を持っているので「戦死＝上がり」であることには馴染めなかったけれど、まだ価値観の未形成な子どもたちがこれを経て「戦死＝成功」と考えてしまうのは自然なんだろうなと思いました。歴史を学べただけでなく、価値観のつくられ方についても考えることができたので良かったです。
- 学ぶこと、感じるものがとても多くて、興味深い授業でした。この授業のことは家で家族にも話しました。
- 「尚武須護陸」以外にもさまざまな種類の色鮮やかな双六を見ることができて、とても楽しかった。ただ楽しいだけでなく、多くの時代的背景やその時求められてい

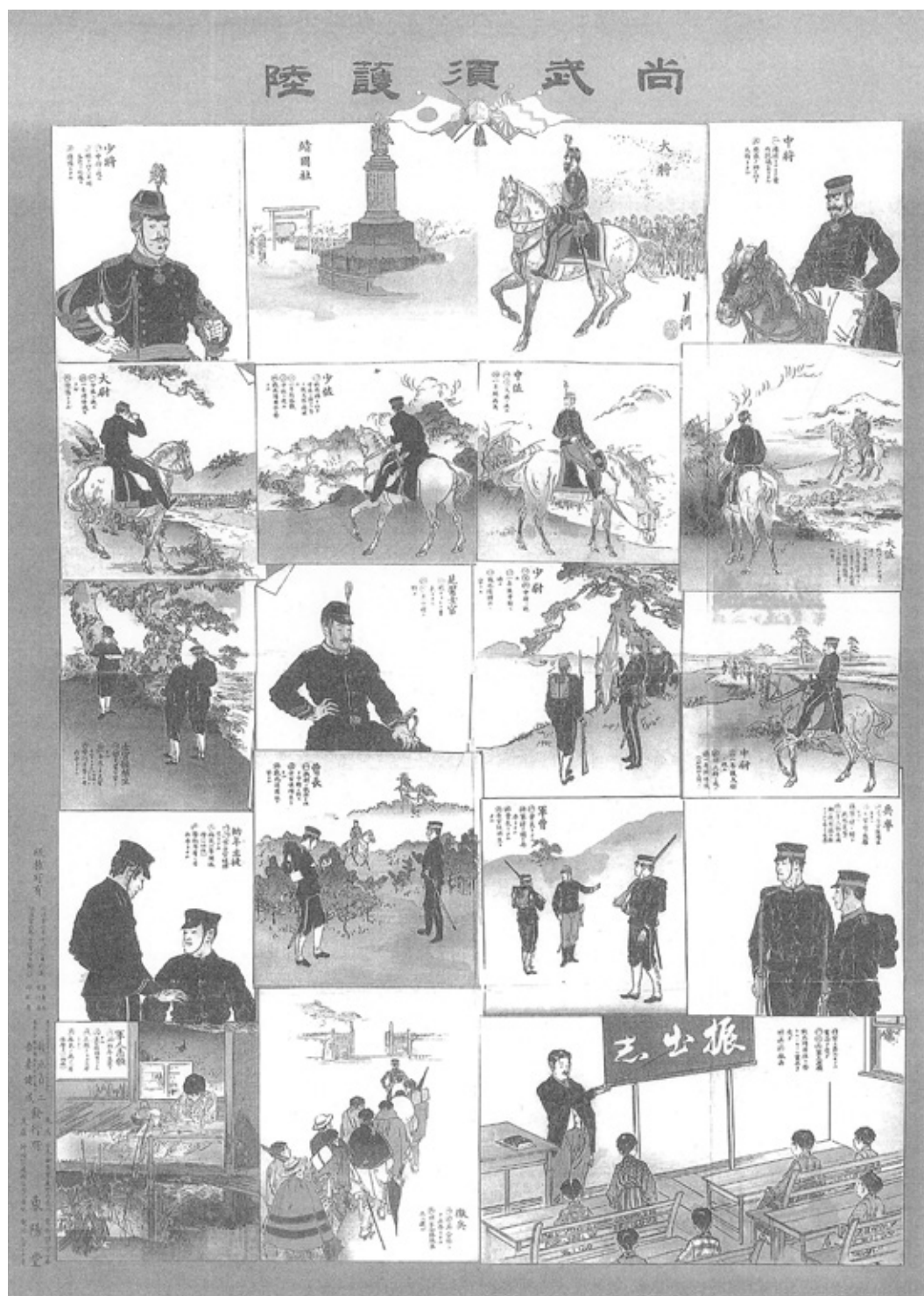
ることを読みとることができることがわかった。

- いくら国家の前では息子が戦死することを名誉であると言っている、母親がそんなことを思っているわけがない。「九段の母」の「母は泣けます／うれしさに」という部分は、そう思っているとしか言えない世間の風潮があったのだろう。
- 女子向けの双六を見て、女性が社会に出たり、へそを曲げたりすること（つまり服従しないこと）が害悪だと考えられていたことがよくわかった。双六のマスが男の子のように「社会の中での成長」ではなく、「情緒面の成長」であったことから、女の子は社会の一員の人間ではなく、それより下位の、かわいい動物のように考えられていたんだなと思った。明治には女性を子を産む道具のようにも考えていたことは日本史で習ったが、それは差別というよりペットの扱いのようなものだったから、感覚として当然だったんだろうと思う。
- これまで軍国主義の異常さ、戦争の悲惨さを映像で見せたりすることは、根本的には戦時下の日本で行われていた刷り込みと同じではではないかと思ってモヤモヤしていた。それが今回解消した。当時の人々の心情に共感することで、戦争が「ふつう」のことに思えて、戦争の怖さがよく理解できた。
- 今まで知ろうとしていなかったことを知ることができて、本当に良かったと思いました。知識がないと自分の考えを持つことができません。周りに流されてしまうだけです。
- まず知ることが大切なのだと思います。私は建築を学びたいのですが、理系に進んでも歴史や政治など文系のことにも常に関心を持っていたい、と強く感じました。そのために交友関係を広げて意見交換をする、新聞を読む等のことを続けたいです。視野を常に広くして物事を考える、その物事がどんなに辛いことであろうと目をそらさず考え続ける、この2つを意識したいな、そう思った1日でした。

6. おわりに

当日まで授業のテーマ、内容は、生徒に「秘密」と言って明かさなかった。それは生徒に幾許かの不安と緊張を与えたが、これまでの学習でどのように歴史の見方、考え方を身につけたか皆の実力を見たい、と話し、発奮させた。日常の暮らしや身近なものに歴史が潜み、時々政治も照射されていること、同時に私たちの一日一日が歴史をつくっていることを感じ、認識できる力を育てていきたい。

圖 1 「尚武須護陸」



*参考資料

- ・小西四郎・寿岳章子他『双六』徳間書店、1974
- ・東京都江戸東京博物館『絵すごろくー遊びの中のあこがれー』、1998
- ・加藤泰子・松村倫子『幕末・明治の絵双六』国書刊行会、2002
- ・大濱徹也『日本人と戦争』刀水書房、2002
- ・山本正勝『絵すごろく 生いたちと魅力』芸艸堂、2004
- ・吉田修・山本正勝『双六（すごろく）』文溪堂、2004
- ・小菅信子『14歳からの靖国問題』筑摩書房、2010
- ・映画「靖国 YASUKUNI」プログラム、2008
- ・大濱徹也『「尚武須護陸」に読みとる歴史』
<http://www.nichibun-g.co.jp/magazine/history/001.html>
- ・東京学芸大学双六コレクション
<https://library.u-gakugei.ac.jp/etopia/sugoroku.html>

¹ この授業については「絵双六『尚武須護陸』の教材化 ～3年生必修『現代社会』の授業から～」本校研究紀要第55号（2009）で報告した。このため本稿には内容が重複する部分がある。

² 前田徳弘（2009）「尚武須護陸の世界」『歴史地理教育』749号 歴史教育者協議会

³ 19世紀のイギリスにおける帝國的国民の形成について、義務教育制度の発足、学校文化や子どもの遊び、日常生活の変化等を通じて学習した。2001年度公開教育研究会での公開授業「世界史A さまざまな資料で読み解く《19世紀イギリス社会》」の記録が、本校研究紀要第47号（2001）にある。